



鎮守の森だより

NPO 法人社叢学会ニュース

第135号

2025年11月1日



第20回 社叢インストラクター養成講座 報告

前迫ゆり（社叢学会副理事長）

2025年9月6日(土)～9月7日(日)の二日間(10時～17時)、京都市左京区の賀茂御祖神社(下鴨神社)と吉田神社で社叢インストラクター養成講座が開催されました。受講生は初日6名、二日目7名、この数年3名程度でしたが、フォローアップセミナー(2名)をはじめ、神職の方、企業にお勤めの方、大学研究者がご参加いただき、講義だけでなく、ディスカッションなども楽しく実施することができました。以下に概要を報告いたします。

【初日：下鴨神社(公文所)】

10時からスタートし、午前中に境内の樹木を観察したのち、「下鴨神社の社叢の生態と文化」(前迫ゆり)、「社叢の組成と構造」(武田義明理事)の講義を行いました。昼食後、13時から関西定例研究会(13時～15時)として合同開催しました(出席者18名)。

神社様のご許可をいただき、通常は立ち入ることのできない本殿後方の社叢を観察しました(写真1)。「糺の森」はエノキ、ムクノキ、ケヤキといった落葉広葉樹が優占する森でしたが、1934年の室戸台風後

2025年9月6日(土)～9月7日(日)
(於 賀茂御祖神社(下鴨神社)・吉田神社)

にクスノキが植栽され、今は常緑広葉樹のシイ・カシ類、クスノキとエノキなどの落葉広葉樹が境内の植生景観を形作っています。午後の講義では櫻井治男理事長が「伊勢神宮の遷宮行事と御榦山」と題し、遷宮とそれを繋いできた人と祭事についてお話をいただきました(詳しくは関西定例研究会報告をご覧ください)。

関西定例研究会後、「社叢の保全」について武田先生に講義いただきました。その後、渡辺弘之顧問には「植物と文化」をテーマに三重県ではタラノキの枝にトベラの葉をつけたものを節分に売っている話やワタナベの妻(渡辺綱、渡辺先生の奥様ではありません)が鬼を伐った刀が北野天満宮に落ちたという話など、人の暮らしと植物と災いについての興味深いお話をうかがいました。

【二日目：吉田神社】

冒頭、吉田神社室川喜幸宮司様に吉田神社の社叢ならびにご祭神のことなど、興味深いお話をいただきました(写真2)。かつてマツ林の林床でマツ



写真1. 賀茂御祖神社本殿後方の社叢を観察
(関西定例研究会と合同実施、武田理事撮影)



写真2. ご挨拶いただいた室川喜幸 吉田神社宮司
(9月7日)

タケが採れた話から、大きくなったシイの大木を伐採し、地元の方がサクラやマツを植栽されている話など、社叢ではあるが、地元の方が吉田山を里山としてもみておられることなどがうかがえました。その後、吉田山のフィールドへ。渡辺先生には若いマツの樹齢の見方をご指導いただきました。「紅もゆるの碑」近くの三角地点付近で植生調査を行いました(写真3)。昼食後、ネイチャーポジティブや30by30を背景に、社叢が自然共生サイトとしても重要な意味をもつことを講義しました(前迫担当)。その後、糸谷正俊顧問から「都市の社叢」について講義していただきました。講義および意見交換会後、資格試験を実施し、5名が受験されました。

受講生全員が社叢について高い意識をもっておられたことから、たいへん充実した二日間になりました。菅理事も受講されたのはたいへんうれしいこと



でした。講座開催に際してお世話をなった賀茂御祖神社様、吉田神社様、ご指導いただいた武田理事、渡辺顧問、糸谷顧問に深謝いたします。次年度も多くの受講生がおられることを願っています。

写真3. 吉田山で植生調査(板井氏撮影)

第96回 関西定例研究会 報告(その1)

2025年9月6日
(於 賀茂御祖神社(下鴨神社))



伊勢神宮の遷宮行事と御杣山

話題提供: 櫻井治男氏(社叢学会理事長・皇學館大学名誉教授)

今回の例会会場である賀茂御祖神社(下鴨神社)境内に「令和十八年四月 第三十五回 式年遷宮」との高札(写真1)が立てられている。「式年遷宮」とは定まった年限を規範として実施される社殿の造替を意味する用語で、21年目ごとに行われてきたと説明されている。

一般的に、神社の社殿等は状況に応じ修復・補修されるが、古社のなかには破損等が理由ではなく、20年、60年など一定の年限で造替を実施する慣例がある。律令時代の法典『延喜式』(卷3)には、「摂津国住吉、下総国香取、常陸国鹿嶋」の正殿は20年に一度「改造」と定められている。現在では国宝や重文指定を受けているこれら神社の社殿は朱や黒の漆塗の建物で造替はないが、神靈奉斎の殿舎をはじめ重要な建物を20年に一度すっかり建て替え、旧殿から新殿へ神体を移す祭りが伊勢神宮の式年遷宮である。『延喜式』(卷4)に、大神宮(内宮)の造替にあたり正殿・宝殿(東西)・外幣殿は新材、他の施設は新旧材を用いることとし、度会宮(外宮)や別宮はこれに準じる定めであった。また遷宮に併せて「御装束神宝」を新調し奉獻され現在も継承されている。

神宮の社殿規模は大きく、扉や棟持柱等には大口径の料材(檜)を必要とし、遷宮も回が重なるにつれ、内外両宮の神域に連なる神路山・高倉山(神宮林)では良材が得難くなり、用材伐採の場所(御杣山)は志摩・美濃・三河国へと移動し、近世中期以降は尾張徳川家の管理した木曽山となった(写真2)。現

在も木曽国有林の料材が用いられるが、その一方で、神宮側においても大正12(1923)年確定の「神宮森林計画」に基づき自己の山での料材調達が図られ、それらがかなり用いられるようになってきた。長い目で見ると、500年というサイクルで循環している神宮林の存在は、〈植樹・育成・伐採(社殿造営)〉を繰り返すという社叢維持の営みにより、遷宮という祭礼文化を支え、伝えることと一体の関係にあるといえよう。



写真1. 下鴨神社式年遷宮案内の立札



写真2. 木曽の御杣山での御用材伐採(2025年6月3日)



南宮大社と南宮山の植物について

話題提供：荒井寛巨（南宮大社禰宜）
 （敬称略） 櫻井治男（社叢学会理事長・皇學館大學名譽教授）
 岡村 穣（社叢学会理事・名古屋市立大学名譽教授）
 長谷川泰洋（社叢学会理事・名古屋産業大学准教授）

岐阜県不破郡垂井町の氏神、八重垣神社訪問

国史跡「美濃國府跡」から一本道を南へ1.6 kmにある南宮大社へ行く途中に八重垣神社がある。文和2年(1353)、北朝の後光厳天皇が南軍の追討を避けて滞在した仮御所跡で、京への帰還の際に牛頭天王社と命名、里人は花車3台を天覧に供して「垂井曳山祭」の起源となった。訪問当日は広場で西町の山車・県重要有形民俗文化財「攀鱗閣(1808)」の虫干しの中で、多くの若者が作業していた。見学後、南宮大社へ移動し、金属製品奉納額が並ぶ回廊を通って正式参拝し、社叢を見学し、境内の伊勢湾台風の倒木で造った豪華な斎館で研究会を開催した。

南宮大社について（荒井寛巨 南宮大社禰宜）

ご祭神金山彦大神は製鉄・鍛冶の神と信仰され、神武東征の折に金鶏を遣わし美濃國府に祀られたが、崇神天皇5年に國府（旧鎮座地）から南方の現在地に遷座し「南宮」と呼ばれるようになった。平安後期に轄や多々良が進歩するまでは、伊吹山の強い自然風を利用した古代製鉄が営まれ、伊吹山を神体山と仰いでいる。古来より「不破の関」を境に関東と関西に分かれ、齊藤道三の言葉に「美濃を制する者は天下を制す」とある。関ヶ原合戦で焼けた社殿を寛永19年(1642)春日局の願いにより徳川家光が再建し、再建時の棟札や623冊の造営文書が残っており、御社殿等18棟と共に国の重要文化財に指定されている。

歌枕としての南宮（櫻井治男 理事長）

鎌倉末期に成立した中世の歌学書『歌枕名寄』卷25には、美濃中山・不破山・藤川・関原・垂井など古歌に詠まれた美濃国の25カ所の歌枕が紹介されている。平安末期の今様歌謡集『梁塵秘抄』(1180年頃、後白河法皇(編))には、諏訪大社・中山金山彦神社(垂井)・敢国神社(伊賀)・広田神社(神戸西宮)の4所の「南宮」が歌われている。諏訪大社の神は古事記(712)に記載され、諏訪の祭祀集団が天武・持統朝と密接な関係があり、『吾妻鑑』に「諏訪南宮上下社」とある。南宮大社は天慶元年(940)の平将門の乱の際に朝廷から延暦寺の阿闍梨が派遣されており、古くより都人に知られていた。伊賀の敢国神社は『三代実録』(貞觀9年(967))に記載がある。3社とも「一宮」で、諏訪・美濃・伊賀の「南宮」を製鉄文化と結びつけるならば、出雲などの著名な地域がないなど疑問があり、『梁塵秘抄』と「一宮制」の成立時期について検討の余地がある。

壬申の乱の意義（岡村 穣 理事）

学会外では「鎮守の森=日本軍国主義」と見られることが多い、「鎮守の森」の世界史的な意義を探した。新興イスラムにより400年続いたササン朝ペルシャがニハーヴァンドの敗戦(642)で事実上滅亡したが、律令制を確立した唐は揺るがず、同年の642年には朝鮮半島3国(高句麗・百濟・新羅)も律令制を導入し強い中央集権国家を目指した。中大兄皇子は孝徳天皇(在位645-654)の改革の抵抗勢力で、白村江の敗戦(661-663)を招いた。壬申の乱(672)では、三輪・鴨・太など中小豪族や東国の豪族が支援し、畿内の豪族の権威が失墜し、律令国家が誕生した。外交では勝ち組の小野氏が活躍し、「好んで山神を祀る」「仏教と自然神信仰の2つに限定」「聖木立」などの宗教政策は新羅と深く関わっている。

南宮大社社叢および南宮山の植物相の特徴（長谷川 理事）

不破郡の植生は、白山・大日岳・能郷白山・伊吹山が含まれる両白伊吹山系植物区に位置付けられ、丘陵地から低山地の森林はシイ・カシ林やソハヤキ要素の植物で構成されるが、日本海要素の植物が白山連峰から越美山系を経て伊吹・鈴鹿山脈に沿って南下し大台・大峯山塊へと移動する回廊になっており、これらの植物も分布している。当地域はまた、西南日本と中部・東北日本の境界にも位置し、アザミ属やヤマハッカ属など、様々な植物において西日本系と東日本系の分岐点ともなっている。さらに、垂井町には国内で2カ所しか確認されていないスズカケソウの自生地もあるとされている。南宮大社境内には、水分条件が良い場所で多いウラシマソウやオオハンゲなどのサトイモ科の植物が多産し、ヤブウツギ等の岐阜県の絶滅危惧種も生育する。南宮山には多様なシイ・カシ類が観察でき、標高280m以上には岐阜県で稀なアカガシ林がみられる。シカの食害はアカガシ林の更新を妨げるため対応策が必要である。豊かな植物相を維持するためにも自然共生サイトの登録が望まれる。



事務局から

会員の皆様へ：E-mail アドレス登録の依頼

～E-mail アドレスリストの作成について～

社叢学会では、昨今の郵便料金や印刷費の高騰を受け、鎮守の森だよりの発行や各種情報提供等についてのデジタル化を進めて参ります。このことで、より円滑で充実した情報提供の体制も作られ、会員サービスの向上にもつながると考えています。会員の皆様におかれましては、普段使われている E-mail アドレスの登録を宜しくお願い申し上げます。

* 登録方法：次の QR コードから登録を



お願い申し上げます。

第 97 回関西定例研究会（日時・場所等、下記参照）

令和 7 年度に「みどりの学術賞」を受賞された森本副理事長にご講演いただきます。同賞は、植物、森林、緑地、造園、自然保護等に関する研究や技術開発など、「みどり」に関する学術上の顕著な功績のあった個人に内閣総理大臣から授与されるものです。ご参加お待ちしています。

次回予告 【第 97 回関東定例研究会】

- ◆日 時：令和 8 年 1 月 24 日（土）14:00～16:00
- ◆場 所：國學院大學渋谷キャンパス（教室は未定）
- ◆テーマ：伊豆諸島の照葉樹林と巨樹（仮題）
- ◆講 師：上條隆志（筑波大学生命環境系教授）
- ◆費 用：無 料（申し込み不要）

次回予告 【第 97 回関西定例研究会】

- 日 時：令和 8 年 3 月 7 日（土）13:00～15:00
場 所：吉田神社参集殿（〒606-8311 京都府京都市左京区吉田神楽岡町 30；京都市バス「京大正門前」停留所より徒歩約 5 分；京阪電車出町柳より徒歩 20 分）
テーマ：「京都と名園～景観生態学の視点から」
講 師：森本幸裕（社叢学会副理事長、京都大学名誉教授）
コメンテーター：今西亞由美（近畿大学総合社会学部教授）
進行：前迫ゆり（社叢学会副理事長、奈良佐保短期大学副学長） * 申込先：社叢学会事務局

『原稿募集』

『社叢学研究』第 24 号（令和 8 年 3 月発行予定）への投稿：論文・研究ノート・短報・資料紹介や調査報告と「鎮守の森の活動報告（祭・音楽会・調査・ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など）」や「社叢訪問記」など、会員の皆様の多彩な原稿を隨時募集しています。

* 次号掲載のための大まかな締め切りは右の通りです。論文等は 10 月末日、活動報告等は 1 月 10 日。

* 会誌の投稿規程と論文の体裁など以下をご参照ください。 <http://www.shasou.org/ijournal/format.pdf>

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひ事務局へご連絡下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町 373 番地みよいビル 303 号

TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

賛助会員の皆様へ、名刺大広告掲載のお知らせ

来年 3 月発行の「社叢学研究第 24 号」に名刺大広告（無料）を掲載します。掲載ご希望の賛助会員の皆様は、来年 1 月末までに、写真あるいは版下原稿を学会事務局までお送り下さい。

編集後記

櫻井理事長をはじめ、執筆いただいた理事などの皆さまのおかげで 135 号のニュースレターをお届けすることができました。誌面の都合で、第 96 回関西定例研究会は今号と次号の 2 回に分割して掲載させていただきます。

事務局には新たに菅沼 裕氏にご着任いただき、学会ホームページにつきましても、長谷川理事のご尽力により、追加修正が進んでおります。

来年度の年次総会は関東支部の担当ですので、内容等についての検討を始めたところです。ご意見をお寄せいただければ幸いです。

（編集担当 賀来宏和）